

黒龍江省チチハルの重工業と食糧基地化

一橋大学大学院商学研究科教授 関満博

1. チチハルの産業化を見ていく視点

九州とほぼ同じ面積、人口約560万人のチチハルの各地をめぐっていると、いくつか興味深い点が見えてくる。

チチハルの一つの象徴である重機械工業は、基本的には市街地に展開していた。また、重機械工業集積と言っても、大型機械設備の第一重型、工作機械の第一機床、第二機床などのいくつかの巨大機械工場が目立ち、しかも、それぞれが基本的に全ての加工工程を内部化して孤立分散的に存在していた。いずれも国有企業改革の最中であり、多くの課題を残しているようであった。また、一部に民営中小企業が登場してきたが、華南地域や華東地域、また、大連あたりに比べても事態の進展は遅い。機械系の外資企業の進出が見られないことも、事態の進展を遅らせているのであろう。

他方、チチハル市街地を出ると延々と穀倉地帯が続き、また、西北部に行くくと大草原の酪農地帯になる。かつての中国東北部の荒野は人びとの努力により豊かな穀倉地帯へと変貌していた。そして、その郊外には2～3時間おきに県城の市街地があり、そこに農畜産物加工の工場が広がっていた。しかも開発が遅かったことから自然環境が維持され、中国で言うところの「绿色食品」「有機食品」の生産が推進されていた。

また、ハルビンからチチハル、そして、内モンゴル自治区に向かう交通インフラもなかなか興味深い。高速道路が意欲的に敷設されている。さらに、ハルビン～チチハル～満洲里～イルクーツクに向かう鉄道（濱州鉄道）がチチハルの東西を横断しており、チチハル部分は複線化され、ロシア方面との間で大量の貨物列車が往来していた。

以上のような基本的な条件を受け止めながら、本稿は中国東北の辺境の地であるチチハルについて、その産業化の現状と今後の可能性について見ていくことにする。

2. 辺境における機械金属工業の展開

新中国成立の1949年のチチハルの人口は、現在の約20分の1のわずか26万人であった。黒龍江省の辺境の中心都市とはいえ、広大な荒地が広がり、産業的には、酒、精米、製麺、木工、皮革等の手工業がわずかに展開していたにすぎない。このチチハルが重工業都市としての基礎を築いたのは1950年代に入ってからである。第1の契機が朝鮮戦争（1950～1953年）、もう一つは、新中国建設の第一歩であっ

た第1次5カ年計画（1953～1957年）であった。

朝鮮戦争の疎開と第1次5カ年計画をキッカケに重工業化

中国東北の近代工業化は19世紀末から始まる。ロシアによる1898年の大連ドック（その後の大連造船）が草分けとされる。その後は、日本による1911年の大連機関車修理工場、1918年の大連機械製作所などが設立され、戦時体制が強化される中で、戦車部品、砲弾、蒸気機関車、コンプレッサーなどの生産体制が編成されていった。

1932年には満州国が建国されていく。大連には満鉄本社が置かれ、鉄道敷設が始まり、満州経営が開始される。その際、遼寧省奉天（現、瀋陽）に重工業基地が形成されていく。瀋陽市街地の南北に満鉄が走る線路の西側に、現在「瀋陽鉄西工業区」と言われる巨大な重工業地帯が形成されていく。

この点、黒龍江省の近代工業の始まりは、1950年6月に勃発した朝鮮戦争が契機とされる。当時、中国の重要な重工業基盤は遼寧省の大連、鞍山、瀋陽に広く展開していた。北朝鮮との国境に近い大連、瀋陽に戦火が及ぶ危険性が高まり、早くも1950年10月には、疎開先を東北最奥の黒龍江省に求め、一部移転が開始されている。瀋陽第一機床廠、第二機床廠の一部移転になったチチハル第一機床廠、第二機床廠が代表的なものだが、その他、チチハル車両廠（現、軌道交通装備）、建華廠、和平廠などが移設されていった。

その後、新中国になってから最初の5カ年計画が1953年から推進されていくが、国家建設の基本を作り上げていくために、156にのぼる巨大な建設プロジェクトが開始される。そして、この156のプロジェクトのうち、8件が黒龍江省に割り当てられた。チチハル第一重型機器廠、ハルビン電機廠、ボイラー廠、タービン廠、量具刀具廠、電表儀器廠、電炭廠、絶縁材料廠がそれであった。第一重型がチチハルに設置された。この第一重型は中国最大の大型鉸山機械、冶金機械を製造するメーカーとして歩んでいる。

新たな展開を見せる機械金属工業

以上のような歴史的な背景を背負い、チチハルの重機械工業は興味深い歩みを重ねていく。第一重型、北満特鋼、第一機床、第二機床の四つの企業が基幹となり、それにアジア最大の貨車製造とされる軌道交通装備を含めた5社が代表的な企業と言われている。さらに、一般的には閉ざさ

れている三つの兵器工場の存在も興味深い。

大型国有企業は改革の真っ只中にあり、企業整理、民営化に取り組んでいた。新たな企業集団として再編されていく過程にあった。他の地域の大型国有企業、機械工業の場合、外資企業との合併合作により劇的に改善されるケースが見られる中で、チチハルの大型国有企業はあまり外資企業との交流は活発ではなかった。

また、こうした中で、民営の中小企業による機械金属工業への取り組みも開始されている。元々、チチハルは機械金属工業をベースにしてきたことから、人的な蓄積は豊かである。国有企業改革の中で、人材や機械設備が放出されてくる。そうした資源をベースに新たな民営中小企業が登場してくることが期待される。

本節では、以上のような基本的な環境をベースに、三つの機械金属工業企業を採り上げ、今後のチチハル機械金属工業を展望していきたい。

中国を代表する大型旋盤メーカー（チチハル二機床）

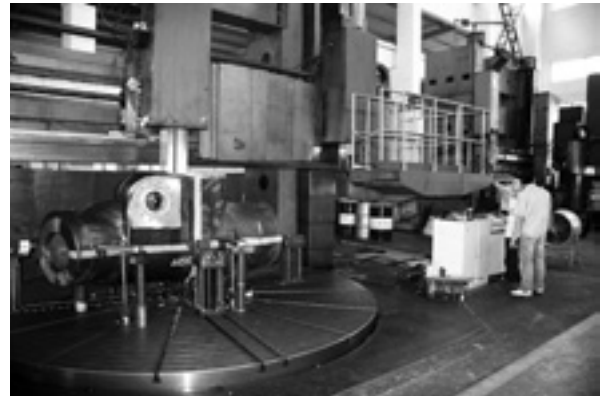
国有超大型重機械メーカーである第一重型と共に、チチハルを代表する機械系企業としてチチハル二機床（集団）有限責任公司（元、チチハル第二機床廠）が知られている。特に、大型の立旋盤（ターニング）については、最大加工直径10mのものが生産されており、中国の各地の機械工場で見かけることが少なくない。

チチハル二機床の前身は、瀋陽の代表的な工作機械メーカーの瀋陽第二機床であった。朝鮮戦争時代に疎開することになり、1950年10月、技術者を中心に家族を含めて500～600人がチチハルに疎開してきている。第一機床もほぼ同じ状況である。

このチチハル二機床は中国で最初にNC工作機械を製造し、また、中国最大の大型工作機械の製造基地とされている。チチハル二機床は、中国では最も早い1958年という時期からNC化に取り組んだのだが、研究開発がその後停滞し、思うような成果をあげることができずに来ていた。設計力は先進国のメーカーとさほどの差はないとの受け止め方だが、製造の面で向上の余地があり、生産技術、製造の手段に問題があるとの認識であった。かつては日本のコマツから鍛圧技術を導入したこともあるが、現在では、むしろドイツとの関係が深く、立旋盤で技術協力し、一部合併により中国国内販売をしていた。

製品の第1は、大型のNC横中グリ盤であり、この領域では世界最大の生産量を誇っている。2008年の生産台数は235台、世界シェアの60%を握っている。主に国内供給だが、一部にドイツ、オランダにも輸出している。

写真1 チチハル二機床製のターニング



第2は、NC門型プラノミラーであり、工作テーブルは1,500mm×6,250mmとされていた。現在、縦9,000mmものを開発中であった。

第3は、NC立旋盤（ターニング）であり、加工直径は1.6～10m、さらに、現在、12.5mのものを開発中であった。おそらく、この領域では世界最大級のものではないかと思う。

そして、これらの製品を作り上げていくにあたっての加工機能の全てを内部化していた。鋳物についても、一部の大きなものは山東省から入れているが、主に内製とされていた。これだけの事業に携わる人員は、約4,100人（病院関係200人を含む）、うち技術者634人、労働者2,758人とされていた。2008年は売上額21億8,028万元、利潤1億4,938万元であった。

日本と中国の工作機械メーカーを見てきた立場からすると、いかにも中国の伝統的な国有企業、基幹的な工作機械工場を思わせるものであった。鋳造から溶接、熱処理、機械加工、組立、検査までの全ての機能を内部化するフルセット型であること、福利厚生部門を大量に抱えていること、さらに、産業の基幹的な部分を担っているという「誇り」を抱えていることが印象的であった。世界的にみて、このような領域を手掛けるメーカーは少なく、今後は貴重な存在になってきているのではないかと思う。

兵器工業の軍民転換による輸出鋳物生産（北鷗衛浴品）

チチハルの中心から西に112km、内モンゴル自治区との境界のあたりに碾子山区がある。その市街地の外れのあたりにひっそりと兵器工場が立地していた。設立は新中国成立まもない1952年であった。チチハルには兵器工場が3カ所とされていた。警備の厳しい正門を入り、さらに、銀色の毛沢東の銅像を過ぎると、また厳しい門があり、ようやく北鷗衛浴（BEO）にたどり着いた。兵器工場の緊張感が漂っていた。

1980年代の後半の頃から冷戦が崩壊し、各国の軍需工場

写真2 北鷗衛浴品のある兵器工場の構内



は軍民転換を求められていく。中国も例外ではなく、国家予算が縮小する中で、各工場が軍民転換に向かっていく。この兵器工場も、1996年にはプレス、小物加工部門の一部の民需転換を意識して、華安工業（集団）公司を工場の敷地内の一角に形成していく。従業員1,100人のスタートであった。

2000年の頃まではスイス企業のOEMとして浴室の水道蛇口周辺の加工に従事していた。当初の売上額は年200万円ほどであった。そして、2001年11月、華安工業は台湾系企業との合弁に踏み出し、北鷗衛浴品を設立していく。中心となるのは台湾人の唐台英氏であったが、工場の経営管理は完全に中国側に任されていた。

唐氏は個人的に欧米のユーザー十数社をつかんでおり、唐氏個人が受注し、北鷗衛浴品に投げてくる。100%輸出ということになる。この間、売上額は急上昇し、合弁前の2000年の売上額200万元から、2005年には1億元を達成、その後、2008年までは毎年1億5,000万元を計上していた。ただし、2008年秋以降の世界同時不況の影響で、欧米市場向けの受注は半減している。

反面、明らかに中国国内市場は高級化に向かい、特に水回りの金属製品が脆弱とされている中国では、当社レベルの製品は大歓迎される可能性が高い。華安側も、中国国内向けの市場開拓をしたいところだが、実質的なマジョリティを握っている唐氏の方針は「中国国内販売はしない」というものであり、身動きのとれない状況であった。

今後、中国国内市場、欧米市場を眺めながら、唐氏がどのような判断を下すかは定かでないが、辺境のチチハルのさらに辺境である礪山子に、兵器工業で鍛えられた興味深い金属加工業が隠れていたのがあった。

鉄道車両部品をアメリカ輸出する民営中小企業(精鑄良鑄造)

チチハル市の市街地から少し離れた開発区の中に、精密鑄造に従事する民営中小企業の精鑄良鑄造有限責任公司の

写真3 精鑄良鑄造の工場



工場が立地していた。全量をアメリカ、ヨーロッパに輸出していた。呉東星総経理は、開口一番、「わが社の特徴は二つ。第1は、株の全ては自分と妻が保有していること、第2に、製品は全量輸出していること」と語り始めた。チチハルは民営の機械金属工業はそれほど盛んではなく、当社がチチハルの代表的な民営中小の機械金属企業といえそうであった。

製品は鉄道車両部品が70%、自動車用部品5~10%、残りが鉱山機械用、農業機械用、鉄鋼業用等とされていた。現在は全て輸出であり、アメリカが80%、その他が20%であった。製品仕様が先方から届き、社内のCADで設計し、金型は浙江省象山の企業3社に依存している。小物部品に強く、1kgから60kg程度のもので得意としている。能力的には500kgまで対応可能としていた。受注ロットは1万個から十数万個であり、1日の生産量は2000個程度としていた。工場内は整理整頓が行き届いており、新進気鋭の民営中小企業であることが伝わってきた。

2009年8月段階の従業員数は約140人、研究開発部門13人、生産部門100人、管理部門20数人から構成されていた。研究開発要員は全国の大学からの新卒、さらに、全国の他社からの引き抜きであった。

総経理の呉氏は、元々、チチハルで個人による商社的な仕事に従事していた。その頃、交流会で鉄道車両部品のサプライヤーを探しに来ていたアメリカ人と知り合う。その世界に魅力を感じた呉氏は2002年に事業をスタートさせている。初年度の売上額はわずか3万ドルであった。その後、技術レベルを高め、売上額もこの間、倍々で推移し、2007年は200万ドル、2008年には500万ドルに達した。2009年は1,000万ドルを目指していたのだが、金融危機の影響から前年を下回ることが予想されていた。

わずか数年で大きく成長し、また取引先を上げてきた。特に、アメリカでの評判がよく、ユーザーの方からやって

くる場合が多い。なお、日本からの問い合わせはない。呉氏に言わせると「日本企業は大連に行くが、チチハルまでは来ない」というものであった。

現在、国内市場が依然として好調であることを受け止め、国内で進められている高速列車に向けての部品開発に踏み出していた。中国東北の辺境の地というべきチチハルで、興味深い取り組みが重ねられているのであった。

伝統的重機械金属工業の新たな展開の課題

以上のように、中国東北の最奥に位置するチチハルには興味深い重機械工業が集積している。全体的に改革・開放が遅れている東北の奥ということから、近年、存在感がやや低下している。チチハル市政府の方針としては、重機械金属工業を緑色食品産業と共にチチハルの二大産業分野として位置づけているが、今後、さらに勢いの増しそうな緑色食品産業に比べ、取り扱いに苦慮しているように見えた。

だが、現在のチチハルに見られるような重機械金属工業を新たに起こしていくことはまことに難しい。特に、世界の政治経済の環境が大きく変わり、中国の北の辺境のチチハルは、ロシア、モンゴルとの交流の拠点の一つとしての意味を高めている。そうした意味では、すでに取り組みされている「哈大齊工業回廊」プロジェクトの意義は大きい。ハルビンから大慶、チチハルに至る300kmのエリアの重工業地帯を現代型に置き直していこうとするものであろう。これだけの重機械工業集積を新たに形成することは難しい中で、中国の辺境でありながらも、北東アジアの新たな交流の中心にもなりつつある黒龍江省に重工業基盤が整備されていくことの意味は大きい。そのような意味を受け止めながら、新たな取り組みを重ねていくことを願う。

3. 中国の農業の新しい形と食品加工

戦後の新中国成立以来、多くの入植者を入れて、チチハルの荒地は見事な沃土に変わっていった。チチハルの農業および食品関連産業の動きは近年、目覚ましいものになってきた。まず第1は、耕地面積が改革、開放の年の1978年の2,186万ムー（約1万4,600km²）から2007年には3,292万ムー（約2万2,000km²）へと30年で1.5倍に拡大したことが指摘される。この間、日本の耕地面積は5万5,000km²から4万6,500km²へと大幅に減少している。現在のチチハルの耕地面積は日本の耕地面積の半分ほどのものになっている。

また、生活水準の上昇を反映して、野菜、畜産物の生産が急増している。野菜の栽培面積はあまり変わらないが、ハウスなどの園芸作物が増加し、生産量は1985年の75万ト

ンから2007年には191万トンへと2.6倍増となった。また、このような動きに伴い、農村の各地で地元の原材料をベースにする食料品関連産業が登場してきた。農業の形も変わり、そこに新たな付加価値をつけていく食品関連産業が幅広く登場し始めている。

中国農村の新たな発展モデル（興十四村）

チチハルの中心地から西北に約100km、約2時間、内モンゴルとの境の甘南県郊外に興十四村があった。延々と続くトウモロコシ畑と貧しい村をいくつも通りすぎた先に、忽然と真新しい別荘風の住宅群が現れ、中心部には質の高いホテルと展示場が設置されていた。そこが、中国北方で最も有名な村、興十四村であった。198戸、957人が暮らし、さらに、2,000人ほどの出稼ぎを引きつけていた。

1956年3月、この興十四村に入植してきたのは山東省西部の臨沂地区の36家族の人びとであった。北の果のチチハルに行けば「未来」があると信じた人びとがたどり着いた所には、家もなく、木も生えていない荒地であり、そこには、「興十四村」と書かれた紅い旗が風に舞っているだけであった。-30℃にも下がる厳寒の地で、人びとはまず冬越えのために茅の小屋を建てることから始めたと言われる。

その後、入植した人びとの営々たる努力により、1980年には中国の村としては初めての「レンガ」造りの住宅を建て、1982年にはカラーTVが全国で最初に入った村としても知られている。その後、農畜産物の加工に踏み出していくことになる。

1985年には乳製品の工場を建設、以後、次々と工場を建設していく。食品添加物工場(1989年)、デンプン工場(2001年)、医薬品工場(2005年)といったトウモロコシをベースにする基幹的な工場を建設している。また、これら35の工場群を集団化させ、黒龍江富華集団とし、2002年には集団の1社(種子開発販売)を上海証券市場に上場している。

2002年からは別荘風の住宅建設を開始し、現在136棟を

写真4 現在の別荘風住宅（興十四村）



完成させ、村の80%の家族が入居している。村民の40%は自家用車を保有していた。果てしなく続くトウモロコシ畑の先に、桃源郷のような村が広がっていた。チチハル市街地から100kmのトウモロコシ畑の中に点在する村の多くは、いまだ品質の低いレンガや泥で作った住まいに居住しているのだが、必死の取り組みを重ねてきた興十四村は、興味深い成果を獲得しているのであった。

米の契約栽培による精米業の展開（宏河米業）

1978年の経済改革以降、チチハルの耕地面積、農業生産額が急激に増加している。特に、水田の増加、米の生産量の増加は著しい。米の生産量は1985年の6万トンから2007年には123万トンと約20年で約20倍に急拡大しているのである。かつてはトウモロコシを主食にしていた人びとも、豊かになる中で「米食」に大きく転換してきたようである。

宏河米業の創業者の褚宝玉氏は、従来、穀物の売買に従事していたが、2000年前後に米の生産拡大、消費拡大に注目し、2001年には宏河米業有限公司を設立し、加工の世界に入っていく。その後、事業が拡大、2005年にはチチハル市郊外の現在地に工場を建設している。3万6,000トンの米を加工している。現在の従業員数は約60人、加工部門が18人、機械・エンジニア6人、財務2人、営業2人、そして、農家への営農指導（ドライバー兼務）が30人という構成であった。

当初は農家から米を買い付けていたが、2004年から少しずつ農地を買収し、現在では10万ムー（約6,700ha）の土地を確保している。現在では農家からの買入れは一部にすぎず、大半が自家栽培となった。中国では近年、企業による農地の買収、大規模経営が進み、そして、土地を手放した農民が耕作を受託するという形が進行している。特に、黒龍江省は1998年に大洪水となり、それを契機に農民が農地を手放すケースが増えた。

現在、宏河米業は「緑色食品」の認証を受けている米を生産、加工、販売している。沿海の発展している地域では、有機米への関心が高まっている。米の産地となってきたチチハルにおいて、高付加価値な米の生産、加工が推進されているのであった。

農業と食品加工の新たな可能性

ここまで検討してきたように、チチハルの農村では、農業をめぐって興味深い動きが生じている。人民公社が解体しておよそ四半世紀、外資導入と輸出工業化によって経済発展した沿海地域との格差に悩みながらも、中国の農村、農業もいつの間にか大きく変貌してきた。このような点を

受け止めながら、ここでは、チチハルの農業と食品加工についての新たな可能性を論じていく。

近年、次第に農地の集約化、流動化が進んでいる。食品工場、民営企業の発展や沿海地域への出稼ぎが始まり、農地を手放す農民も出てきた。そして、この大規模化は民営の事業として取り組まれている。さらに、外資企業もこのような流れを受け止め、農地の使用权を取得し、独自の農場経営に踏み出すケースも出てきた。

土地を手放した農民は、都会に出稼ぎに行くか、農畜産業の委託生産を受けるか、新たに生じている食品加工業に雇用されるか、あるいは、自営業を開始するかなど、選択の幅が広がっているのであろう、かつての戸籍により厳しく土地に縛りつけられていた農民は、流動する可能性を高めている。

さらに、新しい品種や新たな農業技術を獲得する機会が増え、機械化も進んできた。このような状況の中で、より付加価値の高い農産物への転換が始まっている。チチハルの場合は、小麦から水稲への劇的な転換が進み始めている。また、都市住民の生活水準の上昇に伴い、野菜、畜産物需要が拡大していることも重要である。市街地に近い農家ではハウス栽培による野菜生産が普及し、酪農、畜産業なども急速に拡大してきた。

さらに、チチハルの農畜産業を際立たせているのは、「緑色食品」「有機食品」への展開であろう。開発が遅れた分、汚染のない河川として親しまれている嫩江の恵みは大きい。特に、「緑色食品」は中国独自の基準であり、1990年からスタートしている。農家の所得向上、輸出拡大、高付加価値農産物の提供が意識されているのである。

チチハルの耕地は日本の耕地面積のほぼ半分を占めており、しかも、かなりの面積の耕地が汚染されていない。これだけの広がりや至近の位置にある日本農業、食品加工業はどのように受け止めていくべきなのか。日本の食品加工業の参入する余地は大きいように思える。すでに、アメリカの乳製品関連企業、台湾の牛肉加工業、韓国の味噌製造業などが参入しているのである。

まさに、チチハルは日本農業、食品加工業のフロンティアとして私たちの前に登場しつつある。日本農業の再編を国内で考えていくことは基本だが、北東アジアの新たな政治経済環境の中で、チチハルの可能性を日本の問題として受け止めていくことも必要になっているのではないかと思う。

4. 「辺境」から「先端」に向かう

ここまで検討してきたように、中国東北の最奥の辺境に位置するチチハルは、隠された重機械工業基地として噂に

のぼっていたのだが、現場を訪れると、それに加え、日本の九州ほどの面積に、いつの間にか大穀倉地帯、食糧基地を形成していた。延々と続く嫩江平原はトウモロコシを中心に水稻、大豆が栽培され、また、西北部のモンゴルまで続く大草原には牛や羊が草を食んでいた。そのチチハルの耕地面積は日本の耕地面積全体のほぼ半分にも及んでいたのである。

近年の中国経済を語る時、沿海の諸都市の発展、外資企業の進出が目される。反面、内陸の農業は「三農問題」として、その困難さが指摘されることが少なくない。むしろ、その発展可能性について論じるものを目にすることは少ない。沿海の製造業の発展に目を奪われ、私たちは人びとの生活の基本である農業への関心を失っていたのかもしれない。

中国東北の辺境に位置するチチハルは、現在、大きな飛躍の時を迎えている。その場合、何度も指摘してきたように、背景となるものが三つ、ないし四つある。

第1は、辺境の地に意外な重機械工業が編成されているという点である。このような重機械工業集積を新たに形成することは難しく、チチハルの地にそうしたものが存在していることの意味は大きい。かつての辺境のチチハルは、北東アジアの新たな時代に大きな交流の場として登場してきた。冷戦の時代の「辺境」は、新たな時代には「先端」となっていくのである。

第2は、大穀倉地帯の存在である。しかも、この穀倉地帯では、農業技術の改善等により、付加価値の高い農業への転身が進められ、また、農業と食品加工業に新たな可能性を付け加えている。さらに、開発が遅れていたことから土壌汚染の度合いが低く、「食の安心、安全」が求められている現在、可能性を大きく広げている。

第3は、チチハルの位置的条件の大きな変化が指摘される。かつての中国東北の最奥という条件は、北東アジアが開かれてきた現在、交流の拠点、そして、新たなうねりを引き起こす「先端」となっていく可能性が高い。夏の爽やかな気候、厳寒の冬、大穀倉地帯、绿色食品、重機械工業集積などが新たな価値を帯びてくることが予想される。

そして、第4は、辺境の地で新たな可能性に向かおうとしている人びとの存在であろう。荒地を50年かけて見事な耕地に仕立て上げた人びと。チチハルの農畜産業の可能性を受け止め、新たな事業に向かう人びと。このような人びとがチチハルの最大の資産であろう。いわば、フロンティア・スピリットというべきものが人びとのところに深く浸透している。

このような四つの要素が加われば、「辺境」の地は一転して「先端」となっていくであろう。こうしたことを受け止めながら、チチハルの「未来」を語っていくことが期待される。

The Heavy Industry of Qiqihar in Heilongjiang Province and the Forming of a Food Base

SEKI, Mitsuhiro

Professor, Graduate School of Commerce and Management,
Hitotsubashi University

Summary

Qiqihar, located in the frontier area of China's Northeast, is currently facing a period of very dramatic progress. There are four background matters which prompt this.

First, there is the heavy-industrial base which was established from the 1950s. The formation anew of such a heavy-industrial base is not easy. The contraction of large, heavy industries as a global trend is a cause for concern, and the significance is great that this kind of sector was formed in Qiqihar. In the future its playing of a new role within the industrialization of Northeast Asia is anticipated.

Second, there is the transforming of the wilderness of the Northeast into a superb grain belt. The area of Qiqihar's arable land has grown to almost half that of the total for Japan. Furthermore, it appears to be expanding. Concerning this production of agricultural and livestock products, however, new large-scale management, etc., has been commenced, and the food-processing business also has begun a new sudden increase. The expansion of foreign-investor enterprises into this food-processing sector is also becoming apparent, and Qiqihar's agricultural and livestock industries are taking on a new hue. In particular in Qiqihar's case, because development had lagged, the concern about soil pollution, etc., is low, and with the rising interest in the global food "confidence and safety" of recent years it is attracting attention.

Third, Northeast Asia is approaching a time of new exchange, and the locational conditions which Qiqihar is bound to have through being a frontier area are changing greatly. Rather than that, within the exchange of areas such as China, the Russian Far East and Mongolia, its future continuing centrality is hoped for.

Fourth is probably the existence of the people who have raised up the borderlands to this level. What should be called, as it were, a frontier spirit has deeply permeated people's hearts.

Such kinds of favorable elements have built up, and Qiqihar's stepping forward into a new era is anticipated.

[Translated by ERINA]